

## “The Modern Job” の行方

—— ホーソーンと『ヨブ記』 ——

松 山 信 直

### I

衆知のように、ホーソーンと同時代のハーマン・メルヴィルの作品には、ふんだんに聖書への言及があり、聖書中の人物名をかりた人物や、聖書の表現をふまえた表現が非常に多い。ところが、ホーソーンにはそのようなことはあまり多くなく、「ヨブ記」・ヨブへの言及にしても、若干が散在するだけである。<sup>①</sup>

しかし、もしホーソーンが「ヨブ記」をもじった作品を書いていたとしたらどうだろうか。バンヤンの *Pilgrim's Progress* をもじった “The Celestial Railroad” (1843 年, *Mosses* に収録) を書いたホーソーンのことだから、その可能性もない訳ではなく、その作品は、ヨブや「ヨブ記」にしばしば言及したピューリタンたちから、ハーマン・メルヴィルをへて、現代のロバート・フロストやアーキボールド・マクリーシなどへとつながってくる「アメリカ文学と『ヨブ記』」という大きなテーマの一環として、かなりの興味で迎えられるに違いない。ところが、この夢のような話も、現実だと思われた時期が実はあったのである。つまり、「ヨブ記」をもじったある匿名作品が、ある一時期に、ホーソーン作品だとみなされていたことがあったからである。

ホーソーンには死後刊行された全集がいくつかある。たとえば、有名な Riverside Edition だとか、Old Mansé Edition などがある。<sup>②</sup> ホーソーン

作かどうかが疑わしい作品の中にはこのような全集のどれかに収録されているものもあるが、この「ヨブ記」をもじった作品は、どの全集にも収められておらず、一時ホーソン作だと主張された事実も、もはや忘れられて、発表当時のまま埋もれてしまっている。この小論は、アメリカにおいてすら忘れられてしまっているこの作品とその週辺に、さまざまな角度——bibliographical, biographical, critical な角度——から光を当てようとするものである。

この作品とは、“The Modern Job, or the Philosopher’s Stone”という短篇小説であって、日本でも明治・大正の頃、万国史のピータ・パーレイというペン・ネームで有名だったグッドリッチ (Samuel G. Goodrich) が編集していた年刊の gift book, *The Token* の1834年号に匿名で掲載されたものである。<sup>③</sup>

## II

ホーソンの初期の作品は、1837年の *Twice-Told Tales* 刊行までは、長篇の *Fanshawe* と同じく、すべて匿名か、いくつかのペンネームを使ったりあるいは “By the author of ‘Sights from the Steeple’” といったように、先に発表した作品と同一筆者であることを示すだけで、作者の実名をふせて発表されていた。<sup>④</sup> ホーソンはそのいくつかを *Twice-Told Tales* の初版 (1837年) に収録し、さらに、その後の作品やそれまでに未収録の作品を集めて、*Twice-Told Tales* の第二版 (1842年)、*Mosses from an Old Manse* (初版1846年、増補版1854年)、*Snow Image, and Other Twice-Told Tales* (1852年) を出版した。<sup>⑤</sup> ところが、これらの作品集に、雑誌や年刊誌にすでに発表していた作品のすべてが収められたというのではなかった。明らかに、ホーソン自らの手で収録しなかった匿名作品がまだほかにも残っていた。

たとえば、ホーソンは *Twice-Told Tales* の1851年版の序文で、今ま

で出版した作品集に収められているよりもっと多くの作品をこれまでに書いた、と述べ、そのあとで

Some very small part of it might yet be rummaged out (but it would not be worth the trouble) among the dingy pages of fifteen-or-twenty-year-old periodicals, or within the shabby morocco covers of faded souvenirs.<sup>⑧</sup>

とつけ加えている。言うまでもなく、15—20年前といえば匿名時代であって、この初期には *Salem Gazette* のような新聞や、*New England Magazine*、*Democratic Review* などの雑誌、さらに上記の文中で “the shabby morocco covers of faded souvenirs” といっている年刊の *The Token* に短篇作品を発表していたのであるから、上記の序文は、未収録作品がこれらの刊行物やその他の雑誌等の中にまだ残っているのを示唆していることになる。だが、*The Scarlet Letter* の出版を引き受け、その後親交を結んだフィールドズ (J. T. Fields) がホーソーンに対して初期の未収録作品や破棄した作品について問い合わせた時でさえ、ホーソーンは “I cannot be sworn to make correct answers as to all the literary or other follies of my nonage…”<sup>⑨</sup> とにべなく答えている。

それにしても、ホーソーンの意向はともかくとして、彼の全体像の追究にとっては、このような未収録作品、とくに、1825年の大学卒業後から1837年の *Twice-Told Tales* の出版までに発表した匿名作品や破棄した作品がどのような作品であったかを究明することは大切である。もちろん *Fanshawe* をはじめとしてそのうちのいくつかは、ホーソーンの死後刊行された作品集や全集で光をあびた。たとえば、1876年に出版された *The Dolliver Romance, and Other Pieces* には、未完の “Dolliver Romance” をはじめとして、1830年2月21日の *Salem Gazette* に発表されていた “An Old Woman’s Tale” のほか、いくつかの未収録作品が集められたが、<sup>⑩</sup> 未収録作品はこれだけに終る筈がないと考えた人々は少なくなかった。そういう

人々として、サンボーン (F. B. Sanborn)、コンウェイ (M. D. Conway)、ウッドベリー (George Woodberry)<sup>⑥</sup> などの名前が直ちに浮んでくるが、彼等の関心は当然のことながら *The Token* に向けられていた。というのは1828年から1842年まで続いたこの *gift book* には、ホーソン自らの手でその後の作品集に収めた匿名、仮名の作品が27もあったからである。未収録作品がこのほかにもまだあると彼らが考えたのは当然のことであろう。

ラルフ・トムソン (Ralph Thompson) は *American Literary Annuals and Gift Books* の中で、*The Token* にはこの27篇のほかに、何等かの時期にホーソン作とみなされた作品が合計9篇あると述べている。<sup>⑦</sup> トムソンはその9作品の表題を列記していないが、サンボーン、コンウェイ、ウッドベリーを総合すると、それは次の9篇である。“The Modern Job”もその一つに入っている。

1. “Adventures of a Raindrop” (1828年号)
2. “The Young Provincial” (1830年号)
3. “The Fated Family” (1831年号)
4. “The Haunted Quack” (1831年号)
5. “The New England Village” (1831年号)
6. “The Adventurer” (1831年号)
7. “My Wife’s Novel” (1832年号)
8. “The Bald Eagle” (1833年号)
9. “The Modern Job” (1834年号)

便宜上作品に番号を付したが、これら初期の未収録作品の一つ一つについて、ホーソン作かどうかを問題にするのはこの小論の目的ではない。しかし、最後の“*The Modern Job*”の著者問題の扱いと比較する上で二三の例をひいてみよう。

A ある全集に収められながらも別人が著者であることが判明した作品。

8番目の“*The Bald Eagle*”がこれである。この作品は、サンボーン、コンウェイ、ウッドベリー<sup>⑧</sup>によってホーソン作と主張されたし、1900年出版の全集 *Autograph Edition, Large-Paper Edition* およびこの版にもとづいた1904年の *Old Manse Edition* にも収められているが、作者は実はロングフェロウ (H. W. Longfellow) であって彼の手紙中に言及があり、サミュエル・ロングフェロウ著の伝記中にも言及がある。<sup>⑨</sup>

B 別人の選集に収められていたことが判明した作品。

1番目の“*The Adventures …*”はサンボーンがホーソン作と主張したが、すでに1832年に出版されていたチャイルド夫人 (Mrs. L. M. Child) の自作短篇集 *The Coronal* に収められていて、<sup>⑩</sup> 彼女の作であることはまず疑いがなく、ホーソンのどの全集にも入っていない。

C 特に反証がなく、今日確証のないままホーソン作とされている作品。

2番目の“*The Young Provincial*”がこれに当る。サンボーン、コンウェイ、ウッドベリーが共にホーソン作とみなし、*Autograph Edition, Old Manse Edition* に収められている。ブラウン (Nina E. Browne) の *Bibliography* では“probably was not written by Hawthorne”<sup>⑪</sup>とされているが、ブランク (Jacob Blanck) の *Bibliography of American Literature* では“presumably by Hawthorne”<sup>⑫</sup>と言われ、ゲイル (Robert L. Gale) も“may not be by Hawthorne”<sup>⑬</sup>と言いながらも、作品名を年表に加え、かつ梗概も掲げている。<sup>⑭</sup>

これらの例が示しているように、匿名作の著者を決定することは、*internal evidence* だけに基づく限り、根拠が弱く、全くくつがえされてしまう危険があるが、“*The Young Provincial*”のように、具体的反証のないまま、ホーソン作と一応今日でも見なされているのもある。<sup>⑮</sup>

## III

“The Modern Job, or, the Philosopher’s Stone” に焦点をしばってみると、この作品をホーソーン作だとはじめて主張したのはサンボーンである。彼は1831年の生れで、1855年にハーバード大学を卒業するとコンコードに移り住んで男女共学の学校（The Concord School of Philosophy）を開き、エマスンやチャニング（W. E. Channing, 1818-1901）とも親しくなった。ホーソーンが1860年にヨーロッパから帰国してコンコードの“Wayside”に住んだ時、チャニングはホーソーンに手紙を書いてサンボーンの学校に二人の女の子を学ばせることをさかんにすすめている。<sup>⑧</sup> だがホーソーンは女の子は入れず、後にハーバード大学に入った息子のジュリアンをこの学校に学ばせた。<sup>⑨</sup> また、サンボーンは帰国したホーソーンのためにエマスンが開いた歓迎の会にも出席しており、コンコードに帰ったホーソーンとサンボーンは少なくとも知己の間柄にはなった。しかし、二人の間に特に親交はなかったようであり、ホーソーンが若い頃の埋もれたままの匿名作品についてサンボーンに語ることはまずあり得なかったと思われる。先に引用したように、かなり親しかったフィールズに対してさえ、ホーソーンは“all the literary or other follies of my nonage”については口を噤んでいたからである。従って、サンボーンが“The Modern Job”をホーソーン作と見なしたのは、ホーソーン自身の口から聞いたのではなく、作品そのものを検討して、いわゆる internal evidence にもとづいて推断した結果と思われる。<sup>⑩</sup>

サンボーンは *New England Magazine* の1898年8月号に“A New ‘Twice-Told Tales’ by Nathaniel Hawthorne”という文を書き、<sup>⑪</sup> *The Token* の1831年号の117頁から137頁にかけて載っている“The Haunted Quack: A Tale of a Canal Boat”がホーソーン作品であると主張して、この作品の全文を紹介し、そのあとで、この作品にみられる村人の

生活の卑俗さ、些少主義への軽蔑(“contempt for the meanness and triviality of village life”)は、ホーソンの初期のもう一つの作品中で「もっと充分に、かつ露骨にあらわされている」と言って、そこではじめて“*The Modern Job*”の名前を出して、次のように書いた。

This diffuse and juvenile piece is chiefly recognizable as Hawthorne's by a few touches of felicitous description, and by his happily humorous titles for persons and places.<sup>29</sup>

サンボーンはそのあとの作品の人名・地名の例をいくつか掲げた。たとえば、主人公が後半で住むことになる町は Tattleborough といわれ、町の人々は Doctor Longleech, Deacon Pitchpipe, Miss Charity Harkwell などと名付けられている。

サンボーンが“*The Modern Job*”をホーソンの作品と見なした根拠は、このように必ずしも強力なものではない。“*The Haunted Quack*”をホーソン作と強く主張する行きずりに“*The Modern Job*”の名を出したに過ぎないといってもよからう。“*The Haunted Quack*”はその後もホーソン作であろうと見なされているが、<sup>30</sup>この作品と多少類似することと、上の引用文にある二点、“a few touches of felicitous description”と“happily humorous titles”だけで“*The Modern Job*”をホーソン作と主張したのは、かなり性急だったと言わねばならない。

サンボーンに続いて“*The Modern Job*”に言及したのはコンウェイである。彼は1901年6月8日の*The New York Times Saturday Review*に“Hawthorne ; His Uncollected Tales in ‘The Token’”という文を書き“*The Modern Job*”を含む7作品(42頁のリストの2, 3, 4, 6, 7, 8, 9)をホーソン作として、それぞれの梗概をかかげている。<sup>31</sup>だが、文中にはサンボーンへの言及も、また何故これらの作品をホーソン作と見なすかの説明も何もない。ただ7作品の梗概を掲げたあと、次のようにつけ加えているだけである。

… I need only add that none of his writings in “The Token” bears any signs of being written merely for money. Some of them appear to be experiments in various kinds of story-telling. Several come from less depth than others, but they all grow out of ideas and are genuine products of the creative spirit.<sup>⑧</sup>

だが皮肉なことに、彼が言及した7つの作品のうち、すでに触れたように2と4がホーソン作であろうとされているだけである。

コンウェイに続いてウッドベリーもその著 *Nathaniel Hawthorne* (1902年) の中で、ホーソン作と推測されるいくつかの作品に触れて “The Modern Job” の名をあげた。

“The Young Provincial” seems to be the same sort of a tale as *The Downer’s Banner*, … yet it would, perhaps, be more readily accepted, together with *The Haunted Quack* and *The Modern Job*.<sup>⑨</sup>

ウッドベリーはサンボーンがホーソン作とみなしている作品を7つ列記して紹介しているが (1, 2, 4, 5, 7, 8, 9), その出典を明示していない。<sup>⑩</sup> サンボーンは先の *New England Magazine* の中の記事では、すでに触れた “The Haunted Quack” と “The Modern Job” の外に、1の “The Adventures of a Raindrop” の計3つの作品に言及しているだけだからである。しかし、ウッドベリーが今日でもホーソン作であろうとされている “The Young Provincial” と “The Haunted Quack” (上記引用文中の “The Downer’s Banner” は *The Token* ではなく、1829年9月の *American Monthly Magazine* に匿名で掲げられたもの) と並べて、 “The Modern Job” を accept できるものとして特に言及したのは、彼なりに根拠があったことと考えられるが、彼は特にそれを述べたててはいない。

このようにして、“The Modern Job” はサンボーン、コンウェイ、ウッドベリーと続いてホーソン作であると主張されてきたが、実はその論



奥は上に見たように必ずしも十分に示されていたのではなかった。明らかに当時の学者・批評家の権威主義的ものの言い方でホーソーン作だと主張したに過ぎなかったのである。ところが、この三人の一人ウッドベリーが“*The Modern Job*”のホーソーン作説をくつがえすことになった。

ウッドベリーが“*The Modern Job*”に言及した *Nathaniel Hawthorne* は、1902年9月の出版となっているが、厳密には、*Nation* 誌の10月2日号の今週の新刊書欄に書名が見えているから、9月25日以降に出版されたと考えられる。ところが、9月30日付で、ウッドベリーは *Nation* 誌の次の号、すなわち10月9日号に、以下に掲げるような Editor 宛の“*Correspondence*”をのせた。ウッドベリーは、自分の著書が店頭に出るやいなや、直ちにこの“*Correspondence*”を寄せたと思えるが、この手紙で“*The Modern Job*”のホーソーン作説は消えてしまうのである。

In my recently published *Life of Hawthorne*, writing of his anonymous early work, I gave a list of seven tales attributed to him by Mr. F. B. Sanborn, among which are “*My Wife’s Novel*” from the ‘*Token*’ of 1832, and “*The Modern Job*” from the ‘*Token*’ of 1834. The first of these is included in the sixteenth volume of the autograph edition of Hawthorne’s works. Dr. William Everett informs me that both tales were written by his honored father, Edward Everett. That a story of Edward Everett’s should have wandered into an edition of Hawthorne is a striking illustration of the literary breeding and power of our elder Massachusetts statesmen, and also of the danger of attributing authorship by internal evidence. “*The Modern Job*,” it may be added, is much more “*Hawthornesque*” than “*My Wife’s Novel*.” There are a few other tales included in late editions of Hawthorne for his authorship of which I could find no satisfactory proof.®

ウッドベリーが上記で言及しているエベレット (Edward Everett, 1794-1865) は、<sup>⑧</sup> 牧師の子として生まれ、ハーバード大学を卒業後牧師となったが、その後ハーバード大学のギリシヤ語教授、*North American Review* の編集者を歴任して、1825年にはマサチューセッツ州の Middlesex より下院議員に選出され、5期その任にあったあと、マサチューセッツ州の知事を4年間つとめた (1835-39)。“The Modern Job” 出版当時は下院議員だった訳である。1840年代に入ってエベレットとホーソーンの間にはセイレムの税関職に関して奇妙なつながりが生れたが、このことはスチュアートの伝記も扱わなかったために、一部の人々に注目されただけに留まっている。<sup>⑨</sup> エベレットはその後輝かしい経歴を持つことになった。すなわち、英国大使 (1841-46)、ハーバード大学総長 (1846-49)、國務長官 (1852-53)、上院議員 (1853-59) 等を歴任したのである。

このようにエベレットは政治家、学者として輝かしい足跡を残す一方、学生の頃から詩を書き、卒業後一年をへた時には Phi Beta Kappa Club の詩人に推され、ヨーロッパに留学した時には (1815-1819) ゲーテを研究し、1824年にはラファイエット (Marquis de Lafayette) を迎えたハーバード大学の卒業式で “The Circumstances Favorable to the Progress of Literature in America” という講演をし、聴衆の喝采をあびている。彼には、いわば、詩人、文学者の一面があったのである。従って、彼の時代の作家辞典に彼の名が掲げてあっても少しもおかしくなかった。<sup>⑩</sup>

けれども、彼がいくつかの詩を書いたことは明らかであるが、その一方で短篇小説を書いていたかどうかについては明らかでなく、作家辞典も彼の伝記もこのことにはふれていない。先の引用文に見られるように、ウッドベリーは、エベレットの息子ウィリアム・エベレットが “The Modern Job” は父エドワード・エベレットの作品だと “inform” した； と伝えるだけで、どのような形で “inform” したのかも、またウィリアムがどのようにしてこの作品が父の作品であることを知っていたかについても、何も

語っていない。エベレットの著作集の完全なリストもないので、実を言えば、エベレット著者説の根拠も、必ずしも納得のいくものではないと言ってもよかろう。

けれども、先に掲げたウッドベリーの“Correspondence”によって、“The Modern Job”は“My Wife’s Novel”と共にエベレット作と認められるのがその後の通説となった。ブラウンの *Bibliography* ではこの二作ともエベレット作となっている。<sup>⑤</sup>ところが、キャスカートの *Bibliography* では“My Wife’s Novel”がエベレット作であるという言及はあるが、“The Modern Job”についての記載はなく、<sup>⑥</sup> また、ブランクも“My Wife’s Novel”については、ウッドベリーの *The Nation* の記事に言及してエベレット作説をとっているが、“The Modern Job”への言及はない。<sup>⑦</sup> エベレット作とされるこの二作のうち、キャスカートとブランクが、“My Wife’s Novel”にのみ言及して“The Modern Job”に言及していないのは、前者が1900年の *Autograph Edition* と、同じ版型から印刷した *Large-Paper Edition* に収録されているからであろう。なぜ *Autograph Edition* が“My Wife’s Novel”のみを収録したかについては、この全集の *Introduction* を書いたホーソンの次女 *Rose Hawthorne Lathrop* も、*bibliography* を作制した *H. E. Scudder* も一言も触れていない。<sup>⑧</sup>

このように、“The Modern Job”は、1898年8月サンボーンによってはじめてホーソン作と主張され、コンウェイ、ウッドベリーと受けつがれてきたが、どのホーソン全集に収められることもなく、1902年10月ウッドベリーの“Correspondence”でホーソン作説は全く否定され、同じエベレット作とされる“My Wife’s Novel”が一部のホーソン全集に収められたり *Bibliography* の一部に名を留めているのに反して、この“The Modern Job”の方は、かつてホーソン作とみなされた事実があったことすらも埋もれてしまったのである。

## IV

さて、すでに明らかなように、“The Modern Job”の著者が誰であれ、ホーソーン説の根拠も、エベレット説の根拠も、必ずしも納得のいく信憑性のあるものではない。その上、この作品は著者の名声や評価を高めるようなすぐれた作品でもない。しかし、一部の人がホーソーン作とみなしたように、ホーソーンを思わせる要素がそうでない要素と入り混っている作品ではある。このことをふまえて、作品そのものに眼をむけてみよう。

物語は、ヨブに擬されるエベリン (James Evelyn) というボストンの青年が、様々な出来事が重なって裕福な生活からいっきよに没落し、妻と共にわびしい生活を送るが、この不幸に何の不満も感じず、失った富に執着することなく生きることを描いている。

ボストンの裕福な商人の一人息子として生れたエベリンは、父の死後実業界に入って、「自分を職業の奴隷にすることもなく、また、おこたることも軽視することもなく」<sup>⑧</sup> たくみに富を増した。商取引の中心部に倉庫をたて、高い倉庫料を払う必要をなくすると同時に、この倉庫を評価の高い財産としたし、また、製造業にもかなりの資金をつぎこんで利益もあげた。しかもその一方では、音楽を好み、絵画・彫刻を愛し、自ら読書室を作って読書に親しむ一面ももっていた。

やがて彼はエミリー (Emily Grey) という女性と結婚し、海に面した岸壁近くの Rocks とよぶ家に住むが、ある日、荒海に難航している船を見て、他人の苦難を傍観してたのしむという Lucretius の一節を二人で論じ、さらに “We all take delight in beholding our neighbor's trouble.”<sup>⑨</sup> という De la Rochefoucauld の言葉について語り合う。このことは破産したあとの二人に対する町の人々の態度に被さってくるが、二人はそれとも知らず、傍観者的態度はとれない、と考える。

この富と幸福の絶頂にいる二人に、ヨブの場合のように、次々と災難がふりかかってくる。まず、二人が見た荒れる海で難航していた船はエベリンの持船で、中国から高価な品物を運んできたのだが、夜中に嵐のために岩に打ち当たって沈んでしまう。折悪しく、保険もかけていなかったので13万ドルの損失となるが、二人は、自分達の損失よりも死んだ船員の家族を思いやってその慰めに心をくばり、死体の捜索に奔走する。続いて、使者が馬でやってきて、嵐の最中に彼の倉庫が焼けたことを知らせてくる。この火事で10万ドルの損失が加わったが、さらにその日、エベレットが5万ドルを投資していた Bubbleton Manufacturing Co. が、市場の不況、不必要な不動産購入、次々と建設された工場の機械の改善費、融資金の利子の支払等ですっかり破産したことを知らされる。そこへさらに、東南アジアのスマトラにコショーの買付に行っていたもう一つの持船の船長から手紙がきて、原住民におそわれて船を失ったことを知らせてくる。

このようにして、エベリン夫妻はすべての財産を失ってしまう。もちろん二人には子供がなく、子供まで失ったヨブの悲嘆はないし、エベリン自身ヨブのようにいやな「腫物」に苦しむこともなかった。エベリンの没落は、彼をためすに神がセイタンに許したものでないし、また、彼もヨブのように神と論じ合おうとするのでもない。そういう宗教性はこの作品にはない。またさらに、エベリンは、自分の災をのろって「神がわたしを打ち滅ぼすことをよしとし、み手を伸べてわたしを断たれるように」と願ったヨブのように、絶望的になることもなかったし、妻のエミリーも、ヨブの妻のように「神をのろって死になさい」ともいわず、自分達の陥った状況をそのまま受け入れ、寒さやうへの現実に向向おうとする。

財産を失った二人は、Tattleborough の町の中心部に間借り人として住むことになるが、巨大な富を失いながらも、彼等には落ちぶれた

様子は全くなく、この町の「最も快活な、みたところ最も幸福な人々」のように生活する。<sup>⑧</sup>ところが、破産者の二人がこのように生活するのを見て、町の人々は二人に苛立たしさを感じはじめる。Lucretius や De la Rochefoucauld の言葉のように、町の人々は二人がみじめであればよろこび満足したのかもしれないが、この二人にみじめさは全然なかった。それどころか、二人は誰にもおとらない良い服を着ているようだし、客には「並はずれて良い酒」<sup>⑨</sup>を出すし、慈善には町の Dr. Longleech や Squire Closefee に劣らないほどの金額を出すのである。また二人の部屋には大きな豪華な高価本がおいてあるし、立派なピアノすらも二人が住んでまもなくとどけられる。これに加えて町の人々は、エベリンがボストンから四頭立ての馬車で帰ってきたとか、散歩の帰りに、妻に向かって自分達の船が四隻通ったと言っているというので、この破産した筈の二人には間違ったところがあると思いはじめる。

そこで、人々はピッチパイプ氏 (Deacon Pitchpipe) をエベリン宅に訪問させ、二人の実情をたしかめさせるが、ピッチパイプの問に対して、エベリンは、自分は“Philosopher's stone”を持っていると答えるだけである。人々はその意味をくみとれなかったため、学校の先生トウィグモア氏 (Twigmore) に説明を求めたところ、彼は、“Philosopher's stone”とは「マホメットがローマ法王だった時に作りあげた悪魔的発明品」<sup>⑩</sup>だと教えた。人々はエベリンがそんなものを持っているはこの町の性格や精神的幸福、繁栄、人々や家畜の生命と健康が危険にさらされると考え、二人に対して何らかの行動をとらなければならぬと感じ、モリー・ピッチャー (Molly Pitcher) に相談に行く。

モリーは夫と子供に先立たれた未亡人だが、瞑想的で知的で、世俗的な知恵の持主より物事の動きをするどく見てとることができたので、

町の人々は、彼女を “a fortune-teller and a diviner”<sup>⑧</sup> にして、何かと相談にいていた。モリーはエベリン夫妻をよく知っており、必要以上の金は無価値なものと考えて今の生活を快活に切り抜けている二人と会って話をするによるこびを見出していたので、町の人々に向って彼等の卑俗さ、物質主義、金銭欲、教養の低さをついて、エベリン夫妻の生き方を説明する。つまり、エベリンは客に良い酒を出しても自分は一口も飲まない禁酒家だし、ピアノは年に僅か数ドルの借り賃で借りたものだし、豪華な本は公立図書館で借りてきたもの。その上エベリンがボストンから乗ってきた四頭立の馬車は誰もがのれる Salem Stage だし、二人が話していた船はむろん二人の持船ではなくて他人のものだが、隣人の仕事が繁昌していることをよろこぶ人にとっては、自分の見るものすべてが持ち物になるのだ、等と説明し、最後にエベリンが持っているという Philosopher's stone とは、皆に欠けている “domestic peace” であり、“gentle temper,” “clear conscience,” “temperance,” “patience,” “brotherly love” であると言い、最後に、これをまとめると “Their philosopher's stone is a contented mind.”<sup>⑨</sup> だと結ぶ。人々が自分達の浅はかさを指摘されて引きさがったのは言うまでもない。

この結末が明らかにしているように、この短篇は、田舎町の人々の物質主義に毒された俗物性、他人の生き方におせっかいをやく通俗性、他人のみじめさを期待する狭量さを風刺する一方では、エベリン夫婦の破産しながらも富に執着せず、自己の物質的損失にこだわらず、他人を思いやり、与えられた状況の中で賢明に生きて、他人のよろこびを自分のよろこびとする生き方が立派であることを説いている。つまりこの作品は、中流階級に向けられた典型的なダイダクティックな作品なのである。

## V

ところで、著者問題とからんで注目すべき点が若干あるので、それらについて簡単にふれておきたい。

1. エベリンの実業界での活躍ぶり、ならびに貿易業、製造業についての説明や、商品・船舶の保険についての言及などは、この方面のかんりの知識に基づいている。この著者には、たとえ初歩的な末熟なものであれ、経済小説を書くことが期待できそうである。（この短篇と対にされている“My Wife’s Novel”にも出版界の裏話がもりこまれている。）実業の世界に立ちいることはホーソンの他の作品ではほとんど見られないことであって、この作品が書かれた1833年までに、ホーソンがどの程度貿易や商取引について知っていたかははなはだ疑問である。<sup>④</sup>

2. エベリンの生き方に関連して、政治に足をふみ入れなかったことに言及がある。エベリンの幸福な生活を描いた箇所の結びとして、作者は

Prosperous in his private affairs, utterly eschewing politics, as an unprofitable and anxious pursuit, blessed with health, and with an even temper, without cares or troubles, the condition of James Evelyn was as near perfect felicity, as often falls to the lot of man.<sup>④</sup>

と書いている。もちろんこれはヨブの繁栄をふまえた表現だが、特に政治に入らなかつたことにふれて、政治を“an unprofitable and anxious pursuit”といているのは、もしこれがホーソンの言葉だとすれば、Democrat に関係する友人を持っていた（たとえば、大学の同級生 Franklin Pierce は1853年に大統領になっている。）鋭い観察のあらわれと見ることができる。一方、エベレットはすでに1825年以来下院議員となつて政界に入っていたので、これをエベレットの言葉とすれば、体験者の実感であると同時に、筆者の素性をかくすうってつけの表現といえよう。



3. エベリンの富に淡々とした生き方、ことに没落後僅かな収入で淡々としている有様は、ホーソーンの姉が伝える若い頃のホーソーンの考え方に非常に近い。姉エリザベスは次のように言っている。

One odd, characteristic notion of his was that he should like a competent income that would neither increase nor diminish. I said, that it might be well to have it increase, but he replied, “No, because then it would engross too much of his attention.”<sup>⑧</sup>

4. さらにエベリンの金に執着しない生き方——ある箇所では “he had never placed an inordinate value on money, nor prized it for his own sake.”<sup>⑨</sup> といわれている——はホーソーンが1837年の *The Token* にのせた “Mrs. Bullfrog” (*Mosses* に収録) で風刺した Mr. Bullfrog の金銭への執着——つまり、結婚しようとしている花嫁が醜いばかりでなく、無垢でもなく、威厳も慎み深さも無いということがわかって、持参金の5,000ドルの故に結婚しようとする——を裏返しにしたものである。また、すでにサンボーンが指摘したように、この作品の町名・人名はすでに掲げたもの以外も、*Sourface*, *Flashfire*, *Smugglejug* など、二語からなるカリカチュアの命名法によっている。これがホーソーン独自のものとは言い難いが、*Bullfrog* と同じ皮肉なものであることは言うまでもない。

5. 作中には、先に触れたように Lucretius (c 96 B. C.-55 B. C.) への言及があり、ラテン文引用が二つある。ホーソーンは大学時代にラテン語がよくできたとのことだが、<sup>⑩</sup> 作中でラテン文を引用したことはない。Lucretius からの引用文を使ってエベリンが妻と話すのは、二人の教養の深さを示すものではあるけれども、ラテン文であらねばならない必然性はどこにもない。エベレットはハーバード神学校で学んでいた際、ラテン語のチューターをしており、ギリシャ語教授にもなっているので、ホーソーンより古典作家には詳しかったと思われる。

6. Lucretius: について、De la Rochefoucauld への言及があるが、この言及はエベリン夫妻が荒波にもまれていた船を見ている際になされるので、*Voyage dans les États-Uni d'Amérique, fait en 1795, 1796 et 1797* の旅行記のある François Alexandre Frédéric La Rochefoucauld-Liancourt (1747-1827) からのものとの可能性もない訳ではない。ホーソーンはこの旅行記を、1830年5月24日から31日まで Salem Athenaeum から借り出している。<sup>⑧</sup>しかし、その一方ではこれは *Maxims* (1665, 1666, 1671, 1675, 1678) で有名な François, duc de la Rochefoucauld (1613-1680) からのものとも考えられる。先に50頁に引用したのはエベリンの間接引用であるので、出典を明らかにするのは困難であるが、ペンギン版の *Maxims* の英訳 No. 521 に “A neighbor's ruin is relished by friends and enemies alike.”<sup>⑨</sup> とあるのとかなり似ている。ホーソーンは、少なくとも Salem Athenaeum ではこの *Maxims* を見ていない。エベレットについては、どちらの Rochefoucauld についても明らかでないが、彼の学識といい、1815年から1819年にかけてヨーロッパ旅行をした際1817-1818年の間バリーに滞在した事実からみても、どちらにせよ熟知していた可能性はかなりある。<sup>⑩</sup>

7. エベリンの二番目の持船 *Flora* 号の損失を報じてきた船長は、ジャバ島のバタビアから手紙を書いているが、彼がスマトラ島で船を失った後に救われてバタビアに来たのは、セイレムの *Regulus* 号で、その船の船長はホーソーン (Hathorne) だった。衆知のように、ホーソーンの父 (Nathaniel Hathorne) は船長で、1808年航海先の Dutch Guiana で客死しているが、1796年から1798年にかけて *Perseverance* 号に乗ってバタビアに行っており、<sup>⑪</sup>さらに1804年にも *Mary and Eliza* 号でバタビアに行っている。<sup>⑫</sup> スチュアートの伝記によれば、ホーソーンは幼い頃父の航海日誌に自分の名前を書き、日誌中の海洋語をその余白に写しているそうだが、<sup>⑬</sup>スマトラで原住民に襲われるエピソードと云い、ホーソーン船長

のことと言い、作者が海に関係の深いことを示唆している。もっとも、ホーソン船長はセイレムの有名な船長であり、*Salem Gazette* は船の出港・帰港をその都度報じていたから、エベレットがホーソン船長のパタビア行を読んだとしても、決して不思議ではない。

8. この作品の副題は *The Philosopher's Stone* であって、それがこの作品中でどのような意味を持ち、どのように扱われているかは先に触れた通りである。しかし、*Philosopher's Stone* は錬金術師が求めた物質で、これを粉にして他の物質と混ぜると“elixir”となり、劣った物質を金に変えることができる信じられていた。<sup>⑧</sup> そして、その力の故に、この物質は“separate the gross from the spiritual, the pure from the base”という力があるとも信じられていた。<sup>⑨</sup> もちろん、エベレットはこの物質のことはよく知っていたと思われるが、ホーソンは、1842年の *The Boston Miscellany* にのせた“A Virtuoso's Collection” (*Mosses* に収録)の中でこの石に特に言及している。この作品は、世界中のさまざまな珍品を集めた博物館で主人公が陳列品を見ることになっているが、*Philosopher's Stone* は、ホーソンが“The Great Carbuncle” (*The Token 1837, Twice-Told Tales* 初版に収録)に描いた“the Great Carbuncle of the White Mountains”に次いでおいてあり、次のような一節がある。

The virtuoso pointed out to me a crystalline stone which hung by a gold chain against the wall.

“That is the philosopher's stone,” said he.

“And have you the elixir vitae which generally accompanies it?” inquired I.

“Even so ; this urn is filled with it,” he replied. . . .<sup>⑩</sup>

次いで案内人は一杯どうかとすすめるが、「私」は“it would produce death while bestowing the shadow of life.”<sup>⑪</sup>と考えて断る。明らかにこの作品と“The Modern Job”における philosopher's stone の意味は否

定的価値と肯定的価値の大きな違いがあるが、ホーソン好みのものであることは否定できない。

9. “The Modern Job”全体を眺めてみると、物語の構成そのものに緊密さがなく、まとまりに欠けていることは明らかである。ホーソンはこの作品が発表された1834年までに、“My Kinsman, Major Molineux”とか“Roger Malvin’s Burial”（ともに *The Token*, 1832）といった、深層心理の洞察の深さと豊かなシンボリズムを特色とする作品、今日の分析批評にたえうる精緻な作品、を書いているが、これらの作品に較べれば、“The Modern Job”は幼稚な作品であるともいえる。ただし、大学卒業後ホーソンはいくつかの作品集を計画し、その他にもいくつかの作品を書いてきたが、それらがすべてこの精緻な作品に匹敵する密度の濃い作品だったとはいえない。“The Modern Job”が素材の上でホーソンの計画した三つの作品集、“Seven Tales of My Native Land,” “Provincial Tales,” “The Story Teller”のどれにも属さないことは明らかであるが、<sup>⑧</sup>ホーソンはあたかも実験するかのように次々とスタイル・形式・ジャンルの異なる作品を書いてきたので、“The Modern Job”もそういう実験的試みの一つとみなされる可能性がないわけではない。

## VI

このようにみえてくると、この作品をホーソン作だとする内的根拠の絶対的なものは無いにしても、逆に、ホーソン作でないときめつけるにはホーソンを思わせる要素が眼につきすぎるほどあるといえる。しかし、その一方では、かりにこの作品がホーソンの作品であったとしても、ホーソンが後のどの作品集にも収めなかった理由も明らかであろう。

この作品がダイダクティックであることは先にふれたが、一部のスケッチをのぞけば、ホーソンの短篇・長篇の基調は、ノーマルなものを提示するよりはアブノーマルなものを示し、明るいものよりは明るさの背後の

暗さを凝視することにおかれている。ホーソーンがダイダクティックになる時には、このアブノーマルなもの、暗いものが本質として持っている歪み、グロテスクさ、不条理が前提として描かれ、それに対立するものとしてホーソーンが説きたい価値が持ち出されてくるのである。しかるにこの作品では、伝統的価値観からみて非のうちどころのないエベリンの生き方が、作品のはじめから終りまで展開し、それに対照的な中流階級の俗物性、狭量、無知が後半でからんでくる。つまりホーソーンがダイダクティックになる時の方法とは全く逆のことが起っているのである。もちろんこのこと自身に文学的価値がないというのではないが、町の人々の歪み、狭さへの風刺が著しく力を弱めており、伝統的価値が著しく押しつけがましく前面に押し出されているという印象は否めない。そしてエベリンがヨブのように与えられた状況を激しく問わず、現状のもたらす満足感にさっさと安住してしまうことには、「人間の心の真実」<sup>9</sup>がとらえられていないという不満が残る。言葉をかえれば、生き方の通俗的ノームを性急に正面に押し出したために、多くのことが犠牲にされてしまっているのである。

しかし、そういうノームを正面に強く押し出すという性格は、この作品が発表された *The Token* という当時の代表的な年刊誌、クリスマスと新年の贈り物として一般向けに売り出されたアンソロジーの狙いに、あまりにもぴったりと一致する。*The Atlantic Souvenir*, *The Token*, *The Gift* といった当時の長続きして評判の高かったギフト・ブックは、トムソンによれば、はじめの頃は、悲哀感やキリスト教的諦観に充ちていて、死、あるいは死への心準備といった思想にあふれていたが、それが変って、“a desire to bring people to the right way of life as well as the right sort of death” が支配的になってきたという。<sup>10</sup> “The Modern Job” は明らかに、ヨブにひっかけながらも、ヨブの問いかけや絶望とは全く異なった、洗練された、教養のある、満足感に充ちた “right way of life” を押しつけているのである。ここには1830年代の文学を支えた一般読者の底の

浅いジェンティールな文学趣味を満足させる傾向と；世俗的道德を指向する宗教の単なる卑俗化があるだけである。もしホーソンが、バンヤンの *Pilgrim's Progress* にもとづいた風刺作品 “The Celestial Railroad” を書いたように、「ヨブ記」にもとづいた風刺作品を書いたとしたならば、風刺されるのは、町の人々ばかりでなく、ここで modern Job とされているエベリンのような、通俗的ノームに満足している人だったかもしれない。さもなくとも、ホーソンは、エベリンの生き方を安易な自己満足からもっと暗くグロテスクに描いて、彼の言う “moral picturesqueness”<sup>9</sup> を達成するような構想を考えたに違いない。(1972. 1. 12.)

## 注

*The Token* および参照した19世紀および20世紀初頭の文献は、Brown University の Harris Collection と The Ohio State University のホーソン全集編集室の Rare Books Collection および同室に勤務する L. Neal Smith氏の好意に負うところが大きい。この御好意に厚く感謝したい。

- ① ホーソンは *Mosses from an Old Manse* (1846年) の冒頭にかかげた “The Old Manse” の中で、このコンコードの牧師館の屋根裏にあった歴代の牧師の老大な書物に言及している。その中にヨブ記研究書があって、ホーソンはこれを次のように書いている。

A dissertation on the book of Job—which only Job himself could have had patience to read—filled at least a score of small, thickset quartos, at the rate of two or three volumes to a chapter. (*Works* [Riverside Edition], II, 28)

この誇張した調子——一章につき二・三巻の割で書かれた四つ折り版の研究書は もちろんヨブ記そのものよりはるかに大きく、誰も読む人はないだろうという揶揄もあるが——は *The Blithedale Romance* の Coverdale が病気になるまで Job を引き合いに出した時にも見られる。Coverdale は Blithedale 農場に着いた日に熱を出して寝込んでしまい、他の人々が新しい生活に出發したのに病床についていることを嘆いて if I said my prayers, it was backward, cursing my day as bitterly as patient Job himself. (*Works* [Riverside Edition], V, 365) と言っている。Coverdale がここで自分をヨブになぞらえたのは、毎晩敬虔な祈りを捧げる Holingsworth と違っておよそ祈りとは縁の遠い Coverdale がもし祈りとしたら、と

断わっているように、ある条件のもとでのことであって、ヨブの苦難とは比較にならない Coverdale の熱を考えてみれば、いかにも大げさであって、ユーモラスな効果が生れているといえよう。

この二つの引用にはヨブの “patience” への言及がある。それはヨブの理解としてはありふれたものであろうが (Cf. Hillel A. Fine, “The Tradition of a Patient Job,” *Journal of Biblical Literature*, 74 [1955]), ヨブあるいはヨブ記に言及する際のユーモラスな態度は、ホーソン独自の諧謔気味のユーモアということができるだろう。同じような調子が別の箇所でのヨブの言及に見られるからである。イタリーの Church of Santa Maria Novella へ行ったとき、みやげに買った安物のロザリオの玉が梨の形をしていて、売手がそれをヨブの涙だといったのに対して、ホーソンは “They were cheap, probably because Job shed so many tears in his life time” と書いている。 (*French and Italian Note-Books*, July 4, 1858)

これに対し、serious にヨブに言及したのは “The Christmas Banquet” (1844年, *Mosses* に収録) において見られる。この作品は、世の中の最も不幸な人々、悲嘆の極みにある人々が年一回クリスマスイブに集まって晩餐を共にすることを描いた作品だが、ホーソンはこの集まりを、ヨブを引合いに出して次のように書いている。

It was a festival at which the woful man of Uz might suitably have been a guest, together with all, in each succeeding age, who have tasted deepest of the bitterness of life. (*Works*, II, 330)

また、リバプールの領事をしていた頃、アメリカから来てホーソンに会った中年の立派な容貌と身なりの牧師が突然姿を消し、一週間後に別人のように変貌してまた現われた。どうやらその一週間の間に彼はさまざまな誘惑にかられて墮落したらしいのだが、この人物を *Our Old Home* の中ではヨブに較べてこう書いている。

The poor Divine must have felt that he had lost his personal identity through the misadventures of one little week. And, to say the truth, he did look as if, like Job, on account of his especial sanctity, he had been delivered over to the direst temptations of Satan, and proving weaker than the Man of Uz, the Arch Enemy had been empowered to drag him through Tophet, transforming him, in the process, from the most decorous of metropolitan clergymen into the rowdiest and dirtiest of disbanded officers. (*Our Old Home* [Columbus: Ohio State University Press, 1970], p. 27)

(ちなみにこの人物のことは *English Note-Books* 中にも言及はあるが、そこではヨブは引き合いに出されていない。)

このように、ヨブ・ヨブ記への言及はホーソンの著作中に若干散見するだけで、ヨブ・ヨブ記についてまとまった見解は示されていない。

② ホーソンの全集については Nina E. Browne, *A Bibliography of Nathaniel Hawthorne* (New York: Burt Franklin, 1968 [originally published in 1905]) にくわしい。

③ *The Token and Atlantic Souvenir; A Christmas and New Year's Present* (Boston: Charles Bowen, 1934), pp. 269-319. この年刊誌は1828年の創刊以来、*The Token, A Christmas and New Year's Present* と題されていたが、1832年になって、1826年以来フィラデルフィアで出版されて評判の高かった *The Atlantic Souvenir* を吸収して、1833年号から上記のように改題した。しかしここでは以下 *The Token* の通称で統一することにする。

④ たとえば *The Token* の1832年号には次の四篇のホーソン作品がのせられている。

1) “The Wives of the Dead” 2) “My Kinsman, Major Molineux” 3) “Roger Malvin's Burial” 4) “The Gentle Boy” これらの作者名の扱い方をみると、1)は目次で anonymous, 作品の後には F... と pseudonym が与えられ、2)は目次・中味ともに By the author of “Sights from a Steeple” (目次では Sights が Lights と誤って印刷されている) とあり、3), 4)は目次・中味とも anonymous になっている。このような処置は、一つには編者・出版社の方針として、同一作家の作品を同一号に沢山掲げていることを伏せたいためであろうが、もう一つには、いわゆる目玉商品である人気作家の作品以外のものは、埋草的なものと考えて作家名を与えなかった故と思われる。ちなみに、今例にとった *The Token* の1832年号は詩・短篇小説・エッセイ・論文を60篇掲げているが、そのうち作者名を (pseudonym の可能性を含めて) 明らかにしているのは、当時人気のあった Grenville Mellen (1799—1841), H. F. Gould (1789—1865), Mrs. Sigourney (1791—1865), Miss. Sedgwick (1789—1867) などの28篇で、あとの32篇は無名もしくは明らかに pseudonym と思われる作家名の作品である。殆んど無名に近いホーソンにとっては、実名を伏せられてしまったのも無理のないことで、むしろ、かなり人気のあったこの *The Token* 誌に作品が掲げられることだけで満足していたと思われる。

⑤ たとえば、上記 *The Token* の1832年号に掲げられた四作品を例にとると、1)と2)は1852年刊行の *Snow-Image, and Other Twice-Told Tales* に再録され、3)は1846年の *Mosses from an Old Manse* に、4)は1837年の *Twice-Told Tales* にそれぞれ収められることになった。4)は *Twice-Told Tales* の初版に収められ



たあと *The Gentle Boy: A Thrice-Told Tale* と題して、後にホーソンの妻となった Sophia Peabody の挿絵入りで 1839 年に単独刊行されている。

- ⑥ *Works* (Riverside Edition), II, 15.
- ⑦ James T. Fields, *Yesterdays with Authors* (Boston: Houghton, Mifflin, c1899), p. 48.
- ⑧ *The Dolliver Romance, and Other Pieces* (Boston: James R. Osgood, 1876)
- ⑨ F. B. Sanborn, “A New ‘Twice-Told Tales’ By Nathaniel Hawthorne,” *New England Magazine*. (August 1899), pp. 688–696. M. D. Conway, “Hawthorne: His Uncollected Tales in ‘The Token’ Beginning in 1830,” *The New York Times Saturday Review* (June 8, 1901), pp. 397–398. George Woodberry, *Nathaniel Hawthorne* (Boston: Houghton, Mifflin, 1902).
- ⑩ R. Thompson, *American Literary Annuals and Gift Books* (Hamden: Archon Books, 1967 [originally published in 1936]), p. 68.
- ⑪ Cf. note 9.
- ⑫ Wallace H. Cathcart, *Bibliography of the Works of Nathaniel Hawthorne* (Cleveland: The Rowfant Club, 1905), p. 6. Nina E. Browne, p. 27. Jacob Blanck, *Bibliography of American Literature* (New Haven: Yale U. P., 1963), Vol. 4, p. 2.
- ⑬ Mrs. L. M. Child, *The Coronal* (Boston: Carter and Hendee, 1832).
- ⑭ Browne, p. 95.
- ⑮ Blanck, p. 1.
- ⑯ R. L. Gale, *Plots and Characters in the Fiction and Sketches of Nathaniel Hawthorne* (Hamden: Archon Books, 1968), p. xix, p. 171. ただし、この本に収められている作品は全集の Riverside Edition (1883) と Autograph Edition (1900) に収めてある作品に準拠している。
- ⑰ Ohio State University Press から刊行されているホーソン全集では、ホーソン作かどうかと疑われた作品のすべてについて、Nelson F. Adkins が検討を加えることになっている。この全集編集室に勤務する Associate Textual Editor の L. Neal Smith 氏の好意により、Adkins の “Notes on the Hawthorne Canon” という未発表原稿に接したが、それによると本文中に言及した 9 作品について Adkins は次のように判断している。

1. The author is Lydia Maria Child. 2. Low degree of possibility. 3. Low degree of possibility. 4. High degree of probability. 5. Objective evidence points to low degree of possibility. 6. The author is John Neal.

7. The author is Edward Everett. 8. The author is Longfellow. 9. The author is Edward Everett.
- ⑮ Julian Hawthorne, *Nathaniel Hawthorne and His Wife, A Biography* (Boston: James R. Osgood, 1885), Vol. II, pp. 264-265.
- ⑯ *Ibid.*, pp. 264, 267.
- ⑰ Randall Stewart, *Nathaniel Hawthorne: A Biography* (New Haven: Yale U. P., 1948), p. 214. ただし Stewart は Sanborn と Hawthorne の関係にはあまりふれていない。Sanborn は回想録の中で Hawthorne とその関係にふれ、*Token* 誌に未収録のホーソーンの作品がまだあるのではないかという話を、1897年の5月に Hawthorne をよく知っていた W. E. Channing (1818-1901) と交している。(F. B. Sanborn, *Recollections of Seventy Years* [Boston: The Gorham Press, 1909], II, 531.)
- ⑱ Cf. note 9.
- ⑲ Sanborn, p. 696.
- ⑳ Cf. Cathcart, p. 5; Browne, p. 40; Blanck, p. 1.
- ㉑ Conway, pp. 397-398.
- ㉒ *Ibid.*, p. 398.
- ㉓ Woodberry, p. 34.
- ㉔ *Ibid.*, p. 34.
- ㉕ Woodberry, “Hawthorne and Everett,” *The Nation*, Vol. 75 (Oct. 9. 1902), p. 283
- ㉖ Edward Everett に関する資料は Paul Revere Frothingham, *Edward Everett: Orator and Statesman* (Boston: Houghton Mifflin, 1925) および Orin William Long, “Edward Everett” in *Literary Pioneers: Early American Explorers of European Culture* (Cambridge: Harvard U. P., 1935) による。
- ㉗ ホーソーンの “The Procession of Life” (*Democratic Review*, 1843年) の中には、明らかに Whig の政治家 Everett を念頭において描いたと思われる政治家が描かれている。(Works [Riverside Edition], II, 249-250) この政治家の略歴と 1843年までの Everett との略歴(当時英国大使)とは完全に一致する。ところが 1849年になってホーソーンが6月7日付でセイラム港の税関吏を止めさせられた時、Democrat に関係する人々だけでなくホーソーンを知っている一般の人までがこの解雇の不当であることを訴えたので、Whig の有力者だった Everett は当時の国務長官 W. M. Meredith 宛にホーソーンの解任を取消すよう依頼する手紙を書いた。この手紙は1849年6月25日付となっているが、その2日後に Everett は

再び Meredith宛に手紙を書き、ある人からホーソーンはセイレム税関在職中に“the agent of party measures of the most objectionable character”だったことを知らされたので、先日の手紙は取り消すとのべた。これは一つにはホーソーンの解雇を推し進めた C. W. Upham<sup>①</sup>が Everett に告げ口をしたものと思われるが、その一方では、1843年の *Democratic Review* にはじめのせられて1846年の作品集 *Mosses from an Old Manse* の初版に再び掲げられた“The Procession of Life”に Everett が眼をむけて、その中で皮肉られている政治家像のモデルが自分であるということを感じとったためからかもしれない。いずれにせよ、ホーソーンの復職が実現しなかったのは Everett の第二の手紙が決定的役割を果たしたからと考えられる。(Cf. K. W. Cameron, “New Light on Hawthorne’s Removal from the Custom House,” *ESQ*, No. 25 [II Quarter, 1961]) だが、ホーソーンはセイレムの税関を止めたために *The Scarlet Letter* を書く余裕ができたわけだし、“The Custom House”も生まれた。Everett は皮肉にも間接的にホーソーンの代表作誕生に協力したことになる。

① たとえば E. A. Duyckinck and G. L. Duyckinck, *Cyclopaedia of American Literature* (New York: Charles Scribner, 1856), Vol. II, pp. 169-173. あるいは S. Austin Allibone, *A Critical Dictionary of English Literature, and British and American Authors* (Philadelphia: Childs and Peterson, 1859), Vol. I, pp. 569-572.

② Browne, p. 49.

③ Cathcart, pp. 5-6.

④ Blanck, p. 2.

⑤ Autograph Edition と Large-Paper Edition (共に Boston の Houghton, Mifflin 社から1900年に出版された) の第16巻の冒頭に掲げられた“Introductory Note”では(無署名だが第1巻の vi 頁に言及のある H. E. Scudder が筆者と考えられる)、この巻に Appendix として従来未収録の“The Young Provincial,” “The Haunted Quack,” “The New England Village,” “My Wife’s Novel,” “The Bald Eagle” の5作品を掲げたことについて次のように断わっている。

The reader is quite at liberty . . . to reject any or all of the five. The editor can simply say that, after carefully reading a considerable number of stories supposed to be Hawthorne’s, he is disposed to accept these as having strong internal evidence of authenticity. (p. xi)

この版にもとづいて1904年に出版された Old Manse Edition の第16巻では、上記5作品から“My Wife’s Novel”が除かれたので、“Introductory Note”の中

の “the five” が “the four” となっているが、他の表現は全く同じである。恐らく Woodberry 説をとり入れたから “My Wife’s Novel” を除いたものと思われるが、特に何も断ってはいない。

- ③⑥ “The Modern Job,” *The Token* (Boston : Charles Bowen, 1834 [1833]), p. 271.
- ③⑦ *Ibid.*, p. 282.
- ③⑧ *Ibid.*, p. 303.
- ③⑨ *Ibid.*, p. 303.
- ④⑩ *Ibid.*, p. 307.
- ④⑪ *Ibid.*, p. 309.
- ④⑫ *Ibid.*, p. 319.
- ④⑬ ホーソーンが多少とも実業界・貿易界の内側のことを知るようになったのは、1839年にボストンの税関に就職してからのことと考えられる。
- ④⑭ “The Modern Job,” p. 273.
- ④⑮ Letter to J. T. Fields (Dec. 26, 1870), quoted in R. Stewart, “Recollections of Hawthorne by His Sister Elizabeth,” *AL*, XVI (Jan. 1945), 327.
- ④⑯ “The Modern Job,” p. 294.
- ④⑰ Stewart, *Nathaniel Hawthorne*, p. 18.
- ④⑱ M. L. Kesselring, *Hawthorne’s Reading, 1828-1850* (New York : The New York Public Library, 1940).
- ④⑲ La Rochefoucauld, *Maxims*, trans. L. W. Tancock (“Penguin Classics”), p. 101.
- ⑤⑰ パリ滞在中は King’s Library で読書したばかりでなく、Madame de Staël などの所にも出入りしている。(Cf. P. R. Frothingham, p. 42)
- ⑤⑱ Robert Cantwell, *Nathaniel Hawthorne : The American Years* (New York : Rinehart & Co., 1948), p. 17.
- ⑤⑳ Stewart, *Nathaniel Hawthorne*, p. 18.
- ⑤㉑ *Ibid.*, p. 3.
- ⑤㉒ Maria Leach, *Standard Dictionary of Folklore, Mythology and Legend* (New York : Funk and Wagnells 1950), II, 868.
- ⑤㉓ Gertrude Jobs, *Dictionary of Mythology, Folklore and Symbols* (New York : The Scarecrow Press, 1961), II, 1264.
- ⑤㉔ *Works*, II, 551.
- ⑤㉕ *Ibid.*, p. 552.

- ⑤⑧ Cf. N. F. Adkins, “The Early Projected Works of Nathaniel Hawthorne,”  
*Papers of Bibliographical Society of America*, Vol. 39 (1945).
- ⑤⑨ Preface to *The House of the Seven Gables* (The Centenary Edition, Vol.  
II), P. 1.
- ⑥⑩ Thompson, p. 28.
- ⑥⑪ *American Notebooks*, ed. R. Stewart (New Haven : Yale U. P., 1932), p. 18.